彙　報

本會第四回講演會　昭和十四年十一月十八日午後一時半より東京帝國大學法文經第三十七番教室に於て開催。講演は

市河三喜氏　人としての Otto Jespersen イエスペルセンの自敍傳 En Sprogmands Levned (Kobenhavn 1938) を中心として、この有名な言語學者の人としての考察。（言語研究第四號 71–2 頁及び英文學研究第二十卷第一 81 頁以下參照。）

神保格氏　ビューラーの言語三機能說（本號所載の講演原稿を見られたし）

聽衆は約百名であつた。

……

本會評議員會　昭和十五年三月十三日午後七時より東京神田の學士會館に於て。出席者は新村出會長、市河三喜・金田一京助・神保格・東條操・西脇順三郎・福島直四郎の各評議員、及び井筒俊彥・木村彰一・小林智賀平・高津春繁の各幹事。決議事項は下の如くである。

一、本會會則第六條の終りに

「會員にして一時に金百圓以上を納めた者は爾後會費を要しない」

を挿入する。（本號表紙裏の會則を參照）

一、本會總會を來る五月十一日（土曜日）

午後一時半より東京帝國大學法文經第三十六番教室に於て開く。講演者は追つて交渉。その後同學內山上會議所にて晩餐會を催す。

一、本會幹事滿期につき、評議會に計つた所、全部重任と決定。

一、總會講演會以外に今秋會員丈の集會を開き、相互の親睦をはかる。

……

本會の會計年度は從來七月であつたが、種々の不便があつたため、昨年より十二月に改め、會費はすべて前納とすることにした故に昭和十三年度の會費は昭和十四年七月を以つて切れ、七月より十二月の間が昭和十四年度の期間となつたため、その間に出すべき號として第四號を特別に出し、昭和十四年度分の會費として維持會員よりは貳圓を、普通會員よりは壹圓を徵集した。會員中には或ひは不審を抱かれた方もあつた

かと思ふが、上の樣な事情であつたためで、御諒承を乞ふ次第である。(尙ほこの事は前號に別刷の紙を入れて會員に通知して置いた。) 今年よりは毎年三册(一號約百二十頁全體で約三百六十頁)づつ「言語研究」を發行する。但し印刷技術上甚だ困難なる論文が多いため、屢〻活字の不足を來し、又新らしく鑄造する必要があるため、發行が不規則となりがちであるが、之はお許しを乞ふ。

……

本號は何時もよりは稍〻頁數が少いが、これは次號以下で頁數を益し、一年分で約三百六十頁とする豫定である。

……

本會幹事八木總太郎氏本年二月十日應召、勇躍出征せられた。

寄贈圖書

Harvard Journal of Asiatic Studies. Vol. 4, 2, 3/4 (1939)

ib. Vol. 5, 1 (1940)

Bulletin of the School of Oriental Studies (University of London), Vol. X, Part 1. (1939)

ソシュール著・小林英夫譯　言語學原論　東京昭和十五年、(譯者寄贈)